日本語方言の分派とその系脈

藤原與一

日本語現下の方言狀態を、一大動態として眺め、これを構造論的に解釋しようとした。

本土近畿に中央語が成立してからの周圍論的事実は、われわれも多くの事例の上にこれを見ることができる。近古末に盛であつた「お……ある」形式の敬語法も、今日、九州と東北とに、いちじるしい殘存の相を見せている。――日本語の方言分派は、國の全土を統一的な地盤とした、このような周圍的事実の上におこるところが大きかつた。

九州には、東北部ないし東半九州と、肥筑地方と、南九州（から西海にかけての）地方との、史的三段層分派が、大きくみとめられる。

東北・東國地方についても、北奥と、南奥と、北部東部関東との三段層分派が大きくみとめられる。もつとも奥羽には、これを、表奥羽と裏奥羽の両面に分けて見るべき事情もある。

さて、九州の東北部分からほゞなだらかにつゞいた中國山陽・四國北半と、関東の北東部からなだらかにつゞいた関東言語平野とが、おゝよそ、その地盤の高さを等しくしていようか。東西のこれをたがいにつなぎあわすと、こゝに、表日本系言語狀態の比較的新しい地域がとらえられる。

それに対して裏日本がわ、日本海沿岸地帶は、九州の狀態、東北地方の狀態によくつらなる古脈地帶として大きくみとめられる。裏日本系については、雲伯地方と共に、北陸路ことに能登半島が注目される。

九州から四國へは、その南半の狀態によくつらなるものがあり、この点では、土佐と共に伊予南部阿波南部があわせ注目される。ひいては、近畿の和歌山県下に、諸種の観点から、系脈がたどられ、こゝに南海道系統線とも言うべきものが考察される。その延長線を伊豆方面まで引いてみることもできる。南九州・南島の現象と、伊豆七島の現象とは、無縁でない。

以上の諸分派諸系脈を総合的に解釈すると、この國土上での、國語の史的発展がこまかく追証される。

〔こゝで『周布』の見解を述べ、京都中心の時代語の、國の東西への及びかたを検討し、さかのぼつて日本語の成立をうかゞい、結語にはいつて、このような日本語方言狀態に対する國語教育を論じた。〕

――広島大学教授――